

知のメーキング現場としてのフィールド（鳥山純子）

それでは次に、第4巻のお話をいただきたいと思います。第4巻は『フィールド経験からの語り』というタイトルで2021年6月に刊行されました。鳥山純子さんはいまモロッコにサバティカルでいらっしゃって、今日はオンラインでご登壇いただきます。どうぞよろしくお願ひします。

鳥山：第4巻の編者をさせていただきました、立命館大学の鳥山といいます。そもそもこの本を作るきっかけは、この科研が始まるさらに前、2014年に行われた、鷹木恵子先生が代表者をされていた笹川財団のイスラーム・ジェンダー研究会にさかのぼることができます。私は「切り込み隊長」と命名され、言いにくいことをどんどん言っていく役割を勝手に引き受けましたので、この科研が始まった時も、とにかくやりたかったけれどチャンスがなかったこととか、あまり言われてこなかっただけで自分としては重要だと思うことにどんどん挑戦するチャンスを与えてもらったと、半ば勘違いをしたような形で前のめりに取り組みました。そこで私はなんでもやっていいのなら何をやりたいか、を考えた中で、実はフィールドの経験に焦点を当てた議論をしたかったのだと気が付きました。そこで一緒にやりたいといってくださる研究者仲間の皆さんと、研究会を開催できることになりました。当初は、「フィールドから語るイスラーム、ジェンダー、セクシュアリティ」という名前で行っていました。それが、この書籍化の話が出る中で、セクシュアリティは一旦わきに置いて、「個人的経験」に焦点を当てる、という大きなシフトをすることになりました。

そもそもなぜセクシュアリティやフィールド経験に焦点を当てたかったかというと、IGのウェブサイトには、「イスラーム・ジェンダー学科研の始動にあたって」というところで「本研究の目標はまた、こうした分断の克服である。分断の場についての考察を重ねるだけでなく、それをいかに乗り越えるのかを考えることが重要である。」と書いてありますが、この目的にとって、セクシュアリティに注目した議論と、それをフィールド経験に根差して語ることが重要だと思ったからです。イスラームとジェンダーという二つのものが例えれば格差や差別を生み出す核になっているとするならば、どう考えられるだろうか。こう考えて時に、その二つが重要だと思ったのです。例えば中東研究でも女性を対象にした研究では、ジェンダーを扱った研究はすごく多いのですが、セクシュアリティについて書かれたものはほとんどありません。ところが、中東のジェンダーを説明するときに、常々セクシュアリティが持ち出されて、最もわかりやすいものがスカーフ着用の是非をめぐる問題だとおもいますが、「女性のセクシュアリティを管理する」ということが最後の説明として持ち出されてしまう。しかし改めて考えれば、実際のところそのセクシュアリティってなんだろう、というところが抜け落ちてしまっている。そこで、そのところを見ていくことで中東、あるいはイスラームというものを援用して営まれるジェンダーの発現について、もう少しきちんと、セクシュアリティとして何が現れることが期待され、何が本当はずれているけれど

も当たり前として人々に受け入れられているものかというところを見ることが重要なのではないかと思いました。

そんなことを考えて数回研究会を行っていたのですが、やってみたら語られないセクシュアリティに注目してジェンダーを明らかにするというはとても回りくどい話で、セクシュアリティについて正面から考察することは諦めざるを得ませんでした。また特に研究会をする中で、あるいはIG科研の場で公開講演をするなかで、これはイスラームとジェンダーに限らない話かもしれません、女性差別は女性という属性のもとに劣位を強いるけれども、同時に「あなた女性だよね」といわれた時に、それ以外の「私」という要素が消し去られるところに、差別の本質があるのではというところが見えてきました。そうであれば、特定のカテゴリー、特に今回は「ジェンダー」ということだったので、「女性」「男性」という性別になるかと思いますが、現地で行われる差別や分断を乗り越えるために、すでに分断を乗り越えている現場から学んだ方がいいのではというところもあって、書籍では、フィールド経験の個人的な、自分が抱えた違和感だったり自分が経験したわからなさであったりに焦点を当てる方向で執筆者の方には本書の原稿をお願いしました。

大事にしたのは、分断が作り出されるという現象を、そうでなかった可能性を視野に入れて検討することです。どういうことかというと、この科研ではイスラームとジェンダーというものが、ある意味でそこで生まれてくる格差や差別というものを考える視座として使われているわけですが、そもそもその視座について、現実世界でどんなふうに立ち上がるのか、どんな重要性があるのかということから考えてみる必要があるのではと思い、イスラームやジェンダーを所与のものとしないでイスラームやジェンダーが発現する現象を描いてもらいました。

またなぜここでフィールドを重視したかというと、私自身が文化人類学を専門にしていることもあります、フィールドワークとはある意味で「行ってみればわかる」というところに立脚した、物事を理解するためのアプローチだと思います。「行ってみればわかる」ということのなかには、現地に行ってみれば答えがあるというようなナイーヴな考え方だけではなく、行ってみてそこで人と関われば見えてくるものがあるということを前提にしています。つまり人として関わる中で見えてくるものがあるはずだという期待を出発点にしているという意味で、最初の前提が分断にはないんです。むしろ人の共通性に立脚した調査方法だと思います。ただし実際にフィールドに行くと、調査者は人間の交歓に巻き込まれて翻弄されます。こうした状況で、イスラームやジェンダーを持ち出して格差や差別を語りたいといつてもそれはなかなか難しいものです。そもそもフィールドに行ったら調査者としてその場にいる人間が、一番ものがわかっていないということが往々にしてありますし、まず人として扱ってもらえるようになるにはどのように振舞ったらよいのか、どうしたら調査と呼べるような人の話を聞くような関係性を築けるようになるのかも簡単にわかるようなものではありません。「フィールドに調査に行ってきます」と言うのは楽なのですが、実はそれはものすごく大変なこと也有って、日々戸惑い、フラストレーションに襲われること

も頻繁にあります。だけれども、それは、人間の交歓に巻き込まれるという点ではすでに共生している現場もあるわけで、その中でフィールドで生き延びて、人にきちんと正面から向き合ってもらって話がきけるようになる関係性を築いてきた研究者の方に話を聞いて、一緒に考えようと。人とのやり取りの経験を通じて、そこからどうやって一緒に生きていくかを考えることができるのが、フィールドから語ることなのではないかと考えたわけです。

実際の書籍の内容は大きく三部に分けて編集をしました。一つ目は「関係に学ぶ／を築く」です。一生懸命現地のことを知りたくて先行研究を読んで基礎知識を身につけて、現地に入るわけですが、実際にそこで人間関係を築くことの難しさにと直面し、むしろそこで学んだことや、あるいは学ぶ中で一緒に吸収してきたステレオタイプが人間関係を育むことを難しくさせることもあります。決してあらかじめ知識を得ることが悪いことだとは思いませんが、もっと人間的な、例えばコミュニケーション能力の高さなどが足りなかつたことによってなかなか関係が築けないなどの難しさがあります。そういうことを第一部では扱いました。第二部「関係がゆらぐ／に悩む」においては、行ってみたはいいのだけれども、その中で思いもかけない役割を人から与えられていることに気がついたり、自分が築きたいと思っている関係になかなか発展しないというところの難しさみたいなものだったり、そのことに思い悩んで、自分自身を見つめ直すような、そんなフィールドでの日々の葛藤を扱っています。最後の第三部「関係が続く／を終える」では、フィールドとの往来の中で調査者自身も歳を取りますし、フィールドとの関係性も変化していきます。はじめは何も問題がなく築けたと思っていた関係性が、自分自身の人生が変わっていくことによって変化をしたり、あるいは上手くいかないと思っていたものが上手くいくようになったり、仲良くしていた人たちが亡くなってしまったりということで、その後日本に帰ってきたりそれぞれの研究の場に戻ってはいるけれども、現場との関係、現場と自分との間にはそれぞれ時間が流れているんだというところを扱いました。

最後に本書の意義について私が思うものを二点挙げたいと思います。この本は、現場ありきでものを考えたときに、イスラーム・ジェンダーに対するどのようなアプローチを提示できるのかを意識して作りました。この問い合わせに向き合う際に重要なものとしたのが「分断」はどこにあるのか、そしてそれがどのようにイスラームやジェンダーと関わっているのか、という問いただす。この科研ではイスラーム・ジェンダーを視座として用いているわけですが、現実では、イスラームが分断を作り出したり、ジェンダーが分断を作り出したりするわけではなくて、むしろもっと大きな、いろんなことが関係していることが多い中で、イスラームが分断を作り出すものになったり、ジェンダーが分断を作り出すものになることもある。そういうときに、「イスラーム・ジェンダー」からものを見出す視点の重要性は果たしてどこにあるのだろうか、というところです。それを問う視点を本書では大事にしました。イスラームやジェンダーを分断の所与の要因として捉えるのではなく、まず現実から現象を捉え、その中にイスラームやジェンダーを位置付けた点が評価できると考えています。

す。

もう一つは、その「分断」はどのように立ち上がるのか、イスラームやジェンダーに限らずですが、日常生活を営む上で分断は思わぬところから表出するわけですが、それがどういった形で表出するのか、あるいはそれがイスラームやジェンダーというものを使って表出するのだとしたら、それはどういうものをきっかけに表出するのか。それを明らかにすることの大切さを意識しました。本書の中では、私たちが読み取ることができるのは、イスラームやジェンダーが本質的に違いを生み出すというよりは、日々のいら立ちや理解の対立だったり、そういった当たり前の感覚に触発されて、それがイスラームだったり、ジェンダーだったりみたいなものを使って分断が立ち上がるというものである、というところだと思います。しかしイスラームやジェンダーが、みんなが納得する社会的な格差の指標としてコンセンサスのもとに機能している現実もあり、そのこと自体を確認できたことも意義深かったと思います。

本書刊行後に今考えていることは、今回はせっかくの機会ですので少し挑戦的なことを考えてみるならば、そもそも被差別経験をもとに「分断」を語ることは可能なのかというところぜひ、今回の集会の第二部で長沢先生からお話をあると思いますので、私としては伺いたいと思った次第です。先ほど話をした女性差別の核心が、「女性」といったときにそれ以外の属性が無視されて、どんなにその人が頑張っていることや属性があっても無視されてしまって女性であるということを理由に劣位におかれてしまう、それが痛みを生み出すだとすれば、そもそも「分断」を語ることは何の意味があるのだろうかというところです。差別されている側からすれば、分断があろうがなかろうか、自分自身が矮小化されてしまうことが問題であって、むしろどうして自分が矮小化されているのかはおそらくわからない。しかも、わからないからこそ自分が女性であることで劣位におかれるとは思わず自分自身が全否定されてしまうというところに差別の悲惨さやそれがもたらす痛みがあるので考えています。そうだとすれば、「分断」というものを例えればイスラームやジェンダーをキーワードにもってくることでよりよく見えるようになるものは何なのか、あるいはそこからイスラームやジェンダーについて私たちがより学ぶことができるようになるものは何なのかということを、フィールド経験をふまえて改めてもう一度考えてみる必要があるのではないかと考えています。

さらに、そういうふうに差別を考えた時に「公正」は一体どういうふうに必要なのか、「公正」があるから私たちは救われるのか、私たちは人と一緒に生きていくことができるようになるのか、本当に「公正」を求めていくことが重要なのだろうか、「公正」を語ること、探求することは、私たち研究者の自己満足に終わっていないだろうか、ということを考えていきたいと思っています。こんなことを考えるようになった理由の一つは、私は自分をフェミニストと考えているわけですけれど、私たちが今の世の中を生き延びていくためには私人でそれを成し遂げることは基本的には不可能です。どうしても他者と一緒に生きしていく、他者と共に生き延びていくということが不可欠である時に、私が死なないために、差別され

ないために、痛めつけられないように他者との連帯を考える必要が出てきます。けれども、そのためには強い側から弱い人たちと一緒に連帯をすることを考えるのではおそらく意味がないだろうと思います。それをやり始めた時点で、自分が忙しくなった時点で弱者を切り捨ててしまうようなメンタリティを生きていると思うのです。そうではなくて、弱者としての私が、弱者としての他の人たちと繋がっていく方法を考えることがやはり重要になってくると思います。こう考えると、「分断」——今回はサブタイトルにインターフェクショナリティが使われていますが——インターフェクショナリティは果たして分断される側のロジックだろうか、という問題を提起しておきたいと思います。私個人として、あるいは今回この本と一緒に編んでくださった著者のみなさんとして、私たちが知りたいのはおそらく差別される側のロジックであるし、それが自分自身にどういう形で身に起こるかということをふまえて一緒に生きていく方法を考えることだと思います。他方、インターフェクショナリティという概念は、実は弱者に寄り添っているようで、どうして差別がおきるのかという差別が起こる法則のことを話している時点では、差別する側のロジックを追っている（もちろん、そうではないという可能性は絶対にあります）とも思えるわけです。せっかくですので、あえて問題提起として発言させていただきました。

私自身は今年モロッコでサバティカルをいただいて、オランダの学生たちとモロッコでフィールドに出て、彼らが現地で人々と過ごす中で「私にできることは何だろう」とか、「こういう生活を生きている自分が想像できない」と涙を流して語る姿を目の当たりにしています。確かに彼らは恵まれた立場からモロッコの農村に暮らす人々の窮状に涙を流しているわけですが、それは決してナイーヴという言葉で流していい気持ちでもないと思っています。やっぱり現地で彼らと数日共に暮らす中で芽生えた思いやりや、経験した交歓があって、それで自分自身の在り方が揺さぶられていく。そういう経験こそが人をつなぐものであると思うし、自分が何かを始めるきっかけになったりもする。そういう意味でフィールドは統治ではなくて生き延びるためのオルタナティヴな知を作り出す現場として無視できない重要性があると日々実感しています。以上です。ありがとうございました。

後藤：鳥山さんありがとうございました。まさに『フィールド経験からの語り』というタイトル通りのお話を、さらに刊行から1年半を経ていただいたということで、しかも第二部の長沢先生のお話へのたくさんの挑戦状があつて、ますます楽しみになりました。ありがとうございました。